
龍の旅～ドラゴンリベンジャー～

フォック・リザハート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の旅〜ドラゴンリベンジャー〜

【Nコード】

N7855U

【作者名】

フォック・リザハート

【あらすじ】

ポケモンだけの世界ポケルラス、世界は平和な時を過ごしていた。だが世界は『黒の剣』のより、世界の歯車は狂いはじめていった。ドランディアという龍の村で一匹のキバゴとクリムガンは『黒の剣』のよって滅びてしまった村を後にした。月日は流れ。5年後。キバゴから進化したオノンドの少年は。両親の復讐のため旅に出る。一匹のドラゴンポケモンとその仲間達がおりなす成長の物語

原作はポケモンですが技・術や魔法などはテイルズシリーズです。

プロローグ（前書き）

新小説です。

ドラゴン好きな俺にはやっぱりドラゴンは書きたいものですよ
ではプロローグをどうぞ

プロローグ

ここはポケモンだけが住む世界、ポケルラス

この世界のポケモン達はみな共同したり、町を作ったりと人間とは変わらない生活を送っている。

だがこの世界にも悪はいる。泥棒したり、町を破壊したり…組織を作って人の命を奪う…そんなこの世界にあるドラゴンが住む村があった

その名はドランディアと呼ばれる村だ

この村はドラゴンタイプのポケモンが多く住んでいる。特に何もな
く村は平和でのんびりとしていた…しかし

「襲撃だ!!」

「くそっ！俺達の村を守るんだ!!ぐわあああああああああ
あああああああああああああああああっ!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ドランディアはある組織の襲撃を受けてしまったのだ

逃げまとう者、戦って抵抗もむなしく死ぬ者、逃げ切れずに襲撃を
受けてしまい死んでいった者…村は炎と血に染まっていった

……

「父さん…母さん…」

「バルグ！逃げろ！」

「私達は後から来るからお前だけ先に」

町の中のある一軒の家、家の前には3匹のドラゴンポケモンがいた

2匹は硬い黄色の体色をしていて、顎は斧のようなものが2本ついていて細い腕のポケモン…もう一匹は頭に角のような突起でつばらな赤い瞳、顎には小さい刃のようなものが2本ついているポケモン
2匹はあごのポケモンのオノノクス、小さい一匹のポケモンはキバポケモンのキバゴだ、名をバルグと呼ばれている。

「でも…でも…！」

すると一匹のドラゴンポケモンがバルグを掴んで走る、赤い顔に青い両翼、腕や尻尾にはトゲトゲした赤い突起がいくつもついていて、目が鋭いポケモン…ほらあなポケモンのクリムガンが幼いバルグを抱えて走る

「放せリガン！！父さんと母さんを！！」

リガンと呼ばれたクリムガンはバルグを放さなかった…むしろ逃げて逃げてと走る

「ごめんなバルグ、二人の頼みなんだ…」

「そんな！！父さん！！母さん！！」

バルグは泣き叫んだ、力いっぱい…しかし敵はすでにオノノクス夫妻の前に来ていた。

「まさかここまで来るとはな…黒の剣！」
ブラックブレード

バルグの父は目の前にいる一匹のポケモンを睨みつける

そのポケモンは漆黒の鎧を着ていて、どいうポケモンなのかわからなかった

「まさか直接黒の剣の四天王が来るなんて…」

バルグの母はこの漆黒の鎧をきたポケモンを睨む

「私は陛下のご命令でこの村を襲いに来た…悪いが…死んでもらう」

ズシャッ！ザシュッ！

「ぐあっ！？」

「きゃっ！？」

二人は漆黒の鎧をきたポケモンによって斬りつけられた…

二人の傷から血がドクドクと滝のように流れた

「ふん…この程度か…ブレイブドラゴンの末裔まつえいの実力は…正直がっかりだ」

漆黒の鎧のポケモンは剣を鞘にしまい立ち去った

「ノクリア……」

「バルデシュ……」

二人のオノノクスは血を流れてもお互いの名を呼ぶ

「バルグ……生きて……強く……い……き……る……ん……だ……」

二人は手をつなぎ……死んでいった

龍の村は『黒の剣』の手によつて……滅んだ

そしてそれから5年の歳月がたった

プロローグ（後書き）

実際この小説を書くきっかけは…ポケモンベストウィッシュのあれです。

ドラゴンバスターのラングラーの存在によってこの小説でドラゴン撲滅させたくない気持ちもあるので…がんばって書けるようにがんばりたいと思います。

ストーリー性をつけられるようにしたいので

それでは

第1話 復讐の始まり〜思い〜（前書き）

第1話です。

5年後になります。ではどうぞ

第1話 復讐の始まり〜思い〜

ここはポケルラスのルイラ大陸にある村ルシア

ここは平和で学校がある。

そのルシアの村のはずれに一軒の家があった、ほぼ木を使っていて少し小さい建物だ

そんな小さな家から一匹のドラゴンポケモンがドアを開けて出てきた
半分は緑の体色の甲殻におおっていて、顎は飛行機の翼みたいなものがついている。

あごオノポケモンのオノンドだ

ポケモンにはそれぞれ進化というのがある。だがドラゴンタイプは成長が遅いため進化も遅い、なぜかというドラゴンポケモンは寿命がかなり多い…つまり長く生きることができるのだ

このオノンドは…5年前に襲撃されたドラニア大陸にある龍の村、ドランディアの生き残り…当時キバゴだったバルグだ

彼も5年の月日で成長した。クリムガンのリガンに特訓を受けて最近進化したばかりなのだ

「……」

だが彼は悲しい顔をしていた。たとえ進化しても両親は戻ってこない

彼は歩いていた。もちろんルシアにある学校へと

……

「あつ！おはようバルグ！」

元気に挨拶したのは一匹のポケモン、ラッコのような顔で粒粒したものが頬についていて、お腹にはホタテがついているポケモン、ラッコポケモンのミジユマルだ

「おはようケンキ」

ケンキと呼ばれたミジユマルは笑顔でバルグの手をつなぐ

「今日も1日ががんばろうね」

「そうだね」

と、二人は教室へ

……

「え〜というわけで…これが…その…」

バルグは授業を受けている。バルグはちゃんとノートに授業の内容などを書いている。もちろんとなりの席にいるケンキもだ、二人はこれでも頭はいいようだ

キンコーンカーンコーン！

授業のチャイムが鳴った

「それでは授業を終わりにします」

と、担任に先生である一匹のポケモン…ジャロードと呼ばれる緑の蛇で蔓が体についているポケモンが授業の終わりにさせた

「起立！礼！さようなら！」

こうして授業は終わった

……

放課後、二人は帰りながら話していた。

「ねえバルグ、明日は暇？」

「いや、どうしたんだ？」

ケンキは明日は暇なのかをバルグに聞く

「明日さ、気分転換に近くにあるルーンの森に行こうよ」

「そうだな、わかった明日行こうぜ」

バルグは承諾した

「ありがとう、それじゃあ明日の午前9時に」

そう言うとケンキと別れた

「俺も帰るか」

バルグは自分の家へと帰った

……

「ただいま」

「おっ！帰ったかバルグ」

玄関で迎えたのはクリムガンのリガンだ

「うん、それより明日はケンキと森に出かけるんだ」

「そうか」

リガンは納得する。

「あれから5年たつな」

「そうだな…父さんと母さんを殺した奴を…そして黒の剣を…絶対に」

バルグの目が鋭くなる…それも憎しみをもったような目だった

「まあ落ち着け、焦っていても剣や技が鈍くなるぜ」

「わかってる…」

そう言つて2階へと上がったバルグ

「…わかってるけど…俺もお前も同じだ…」

そうリガンは言つた

……

夜…

……

………

バルグは夢を見ていた。

目の前には自分の両親がいた。

だが両親は炎に包まれて消えていった。そして彼は…泣き叫んだ

「ハッ！」

ガバッ！とバルグは起きた

まだ夜中である。

「また…あの夢…」

バルグは悪夢を見ることがあった…そして目には涙があった

「（父さん…母さん…）」

彼には辛く苦い思いだった。

「（でも俺はかならず仇を取るからね…父さんと母さんを殺した奴等を…）」

怒りと憎しみが彼の心に燃え上がらせる

そして朝を迎えた

第1話 復讐の始まり〜思い〜（後書き）

1話目で悲しい内容になっていますが…なれるのに時間はかかりません。

バルグ「作者も決心はついたな」

心情って考えるのも結構なものだよ（汗）

バルグ「どうなんだか」

第2話 不思議な水晶（前書き）

第2話です。

バルグ「作者遅い（怒）」

ケンキ「まあまあバルグ（汗）」

ごめん、色々とあつてか（汗）

バルグ「それより第2話の方」

そうだね、それでは第2話を…

バルグ・ケンキ「どうぞ！」

おい！？セリフとるな！！

第2話 不思議な水晶

「行つてきます！」

「気をつけるんだぞ！」

バルグはケンキが待っているルーンの森へ

……

ルーンの森入口、そこにケンキがいた

「来たね」

「待たせたな」

「いいや、僕もちょうど来たんだ…それじゃあ行こう」

二人は森の中へと入っていった

……

ルーンの森は明るく、綺麗な場所だ…この森は月のように綺麗というのがこの森の名のきっかけだ、そんな森の中を二人のポケモンが歩いていく。

森はうつとりとしたように生い茂っている。すると

「ケンキ！隠れて」

「え？」

咄嗟にバルグはケンキの腕を掴んで木の幹に隠れた、その先には黒い服を着た3匹のポケモンがいた…しかし顔を隠しているため姿はわからない、すると彼等の会話が聞こえる

「ここに龍の水晶が眠っているはずだ」

「くそっ！一体何処にあるんだ！」

「見つけないとキラル様に殺される…い…行くぞ！」

3匹のポケモンは森の奥へと入っていった

「今のは…」

隠れていた二人が出てくる

「あいつら…」

するとバルグの目が鋭くなる

「（あいつらは…父さんと母さんを…あいつらだけは絶対に…！）」

するとバルグは3匹の後を追うように追いかけた

「あっ！待ってよ！」

後にケンキもバルグの後を追う

……

森の奥…そこには広い湖があった

だが黒い服のポケモンの姿はなかった

「くっ！見失った！」

「はあはあ、バルグ…そんなに走らないでよ！」

ケンキが疲れたように走ってきた。かなり汗をかいているようだ

「ごめん」

バルグが謝った

「いや、まあ気持ちはわかるよ…」

「そうなんだ…ここは湖だけど…」

かなり広い湖で何処まで深いのかわからない

「それじゃあ僕がもぐってみるよ」

ケンキが準備運動をしながらそう言う

「でもあいつらが」

「大丈夫、見つからないようにするからここで待ってて」

ケンキはそう言つと湖にもぐつた

「大丈夫なのかな（汗）」

バルグは心配する

……

ケンキは泳いでいる。種族がミジュマルのため大体の水タイプのポケモンは泳げる者が多い、ただ水中しか移動できないポケモンなどの中にはいる。ケンキは水中と陸上どちらの環境に適応しているため泳いだり歩いたり是可以する

そうこうしてゐるうちにとある岩壁がケンキの前に現れた、まるで遺跡のような岩壁だった、その岩のくぼみのところに水色に輝く水晶があつた

「なんだろう？」

ケンキはその水晶を抜いた

スポッ！

こつも簡単に水晶は抜けてしまつた

「とりあえずバルグのところに戻ろう」

ケンキは急いでバルグの元へ戻つた

……

「遅いな」

バルグは座ったままケンキの帰りを待っている。すると

ザバーン！

勢いよく水が飛び出したと思えば、ケンキがジャンプして帰ってきた

「ケンキ〜！」

なぜかバルグは怒っていた。それはケンキは勢いよく飛び出してしまったせいで水をかぶってしまったのだった

「ごめんバルグ」

ケンキは謝った

「で？その水晶は？」

「あ、そうだった…すごく綺麗だよ」

水晶は透き通った水色に輝いている。

「俺にもさわらせて」

バルグは水晶にさわった、すると突然光が二人を包み込んだ

「なっ!？」

「何!?!この光!?!」

するとバルグの頭から声が聞こえた

…希望龍の血を引き継ぐ者よ…

「（な…なんだ!?!俺の頭に直接!?!）」

数分後、光が収まり二人の姿が確認できた

「一体なんだったんだろう?バルグ?」

バルグはうわの空になっていた。

「バルグ!」

はっ!とわれにかえりバルグは首を横に振った

「ごめん、ちょっとボーっとしちゃって…とりあえず帰ろう」

「そうだね」

二人は湖から離れた

第2話 不思議な水晶（後書き）

バルグ「（この水晶は一体？希望龍ってまさか！？）」

ケンキ「バルグ、なんだか様子がおかしいみたいだね」

まあ次回あたりでなんとかなると思うけど

ケンキ「作者さんがしつかりしないからだよ」

おい！？…まあ俺もそうかもね

ケンキ「以外にそこ受け止めるんだね（汗）」

第3話 衝突（前書き）

バルグ「遅い！（怒）」

ケンキ「何やってんの作者さん」

ごめん（汗）

バルグ「言い訳はいい！龍の波動」

あんぎゃあああああああああああああああああああああ
あああああああああつ！！！！！！！！！！！！！！！！！！？

ケンキ「それじゃあ第3話をどうぞ（汗）」

第3話 衝突

帰り道

バルグとケンキは不思議な水晶を見ていた。だが水晶は透き通る水色に輝いたままで光を発することはなかった

「バルグに声が聞こえたなんて…なんでだろう？」

「俺にもわからないよ…それにあの声は誰だったんだろう…」

声の主が誰なのかもわからずに首をかしげるバルグとケンキ、そこでケンキは

「とりあえずこの水晶はバルグが持ってたほうがいいかもね」

「わかった」

ケンキはバルグに水晶を渡した、その時

「見つけたぞ！」

『?!』

二人の背後から3匹の黒い服を着たポケモンが現れた

「その水晶を渡せ！ガキ共」

黒い服を着たポケモン達は吹っ飛ばされた

「くっ！撤退だ！」

黒い服のポケモン達は撤退した。

「危なかったね」

「あんな奴等どうってことない…」

と、冷酷に言うバルグ

「それにしても一体何者だったんだろうあの黒い服のポケモン達は…」

気になるケンキ

「行こうぜ…」

バルグは暗いまま歩いて行った

「あっ！待って！」

バルグの後をケンキがついていく

この水晶が…後の彼等の冒険の始まりを表すことを、二人は知らない

第3話 衝突（後書き）

バルグ「あの水晶は一体…」

ケンキ「そして僕達の村が大変な事に」

次回、『始まりの旅』

バルグ「俺は一体…」

第4話 惨劇

次の朝：

バルグ「おはよう」

バルグはあくびをしながら階段を降りてきた

リガン「おはよう、昨日何かあったのか？」

バルグはギクツと動揺するがいつものように「なんでもないよ」と言った

リガン「そうか…それじゃあ飯にするか」

バルグは朝食をとり、学校へと向かった、バルグの家はルシア村から少し離れている。遅刻にならないか？と疑問に思うがこれも特訓のため少し遠くしてあるのだ（リガンの案で）

……

バルグ「はあはあ」

バルグは走って村へと向かう…すると

バルグ「なんだ？村から煙が上がってる…」

バルグは村に煙が上がっているを見た、急いで村へと向かった

…

バルグ「これは!？」

それは衝撃だった…村は火の海となり村中大パニックとなり逃げ惑う村人のポケモン、血を流して死んだポケモン…血と煙のにおいが漂う…バルグはこうちゃくしてしまった…そしてバルグは思い出す…5年前に自分の村がこのような事になったことを

ケンキ「バルグ!！」

ケンキがバルグに駆け寄る、怪我はしていないようで無事だった…バルグはハツとし、ケンキを見る

バルグ「一体何が起こったんだ!」

バルグはケンキに質問する

ケンキ「『黒の剣』が…」

バルグ「えっ!？」

黒の剣がこの村を襲ったのだ…しかも

ケンキ「龍の水晶を渡せと言ってきたんだ…」

バルグ「くっ!」

バルグは駆け出す

ケンキ「あつ！待ってよ！」

ケンキもバルグの後を追いかけた

……

????「さあ！龍の水晶をもったガキを渡せ！」

一匹のポケモンが叫ぶ、しなやかなスタイルに長い尻尾、顔に少し長い髭がピンと横に立っていて耳が小さいポケモン、ぶじゅつポケモンのコジヨンドだ、コジヨンドに後ろには黒い服のポケモン達があった、そこにバルグが来た

????「ほおゝ来たか、貴様だな、龍の水晶を持っているのは？」

バルグ「お前らは…黒の剣だな？」

バルグの質問にコジヨンドが笑う

コジヨンド「ハハハハ！その通り！あたしはキラル…四天王、闘殺のキラルだよ！」

コジヨンド…闘殺のキラルと名乗った雌のコジヨンドが睨みつける、狂気のような目をしている

バルグ「まさか四天王が来るなんて…」

キラル「こんなガキに手間取ってるなんて情けないねゝ今度こそ龍の水晶を奪うんだよ！」

キラルの命によりキラルの後ろにいた黒いポケモン達がバルグに襲い掛かる

バルグ「ドラゴンクロー！」

バルグはドラゴンクローで切り裂いていく。そこから剣を取り出して斬りつけていく

黒の剣団員「隙あり！！」

バルグ「！？」

バルグの隙をついて一匹の黒の剣団員がバルグに攻撃しようとする。しかし

????「アクアエッジ！！」

水の塊が黒の剣団員に当たる

ケンキ「危なかったね」

ケンキだった

バルグ「サンキュー！ケンキ！」

バルグは再び黒の剣団員を斬りつける

バルグ「散沙雨！」

バルグは連続突きを繰り出し黒の剣団員達を蹴散らした、残ってい

るのはキラルのみだ

キラル「やるじゃない…これがブレイブドラゴンの実力っていうのかい？」

バルグ「！？」

キラルの言葉にバルグは戸惑う

キラル「だがあたしをこんな玩具共おもちゃと一緒にしないでくれ…三散さん華んか！」

キラルは接近して三連続攻撃をバルグに打ち出す

バルグ「うわっ！？」

バルグは数回バウンドして倒れてしまう、剣もカランカランと音を立てて地面に落ちる

ケンキ「ウィンドカッター！」

風の刃がキラルの周囲に発生する

キラル「こんな雑魚術であたしに勝てると思うな！！」

キラルは素早く動いてケンキを殴った

ケンキ「うわっ！？」

ケンキは飛ばされて木に激突する

キラル「ハハハハ！弱いね！ブレイブドラゴンがこんな雑魚なんて、さて…トドメといこうか！！」

キラルはバルグに迫る

バルグ「（やばい……このままじゃ！）」

バルグは体を動かそうとするがダメージを受けて動けない…痛みがバルグにおそいかかる…

[illegible]

キラルが攻撃してきた…その時

「獅子戦吼！！」

獅子の形をした鬨気がキラルを吹っ飛ばした

キラル「くっ！誰だ！」

キラルがあたりを見渡す、そこから斧を持ったクリームガンがいた

バルグ「リガン!？」

リガンだ、リガンはそこからさらに攻撃に転する

リガン「裂空斬！！」

リガンは回転して回転斬りを決める

キラル「くっ！今日の所は引き上げてやるよ…だが次会ったら…容赦はしないよ！」

キラルは他の団員を連れて撤退した

リガン「まったく、騒がしいと思ったたらこんなことになるとはな」

リガンは自分の斧を背中に抱えた

バルグ「リガン…」

バルグはリガンを見る

リガン「とりあえず家に戻るぞ…」

リガンはバルグとさらにケンキを抱えた

ケンキ「うつ…」

ケンキは痛みで苦い表情をする

リガン「あまり無理するな…待ってくれ」

リガンはそう叫ぶ…そこから

????「出て行け！」

????「お前らのせいだ!!」

????「二度と来るな!!」

村人からの罵声が響く

リガン「ああ!!もうこんなところ二度とごめんだ!!」

リガンは一喝してバルグとケンキを連れて村から出て行った

第4話 惨劇（後書き）

リガン「俺の活躍ここまで!？」

出番的にヒーローな感じだったけどね

バルグ「おいバカ作者、やられてるぞコノヤロウ（怒）」

落ち着けお前は!？

ケンキ「四天王の一人だから僕達の実力では無理だったんだから落ち着こうよバルグ」

バルグ「そうだな…」

ふう〜
↑安堵

バルグ「でも村を追い出されちまった…」

ケンキ「僕達これからどうなるんだろう…」

それは次回にてね

第5話 旅立ち（前書き）

前回みなさんに謝っておかなければならないことが…

前回お伝えしていませんですが…書き方を元に戻しました…それを伝えるのを忘れてしまい申し訳ありません

バルグ「何やってんだよおい（汗）」

リガン「作者のド忘れは今に始まったばかりだしな（汗）」

ケンキ「もういいからタイトル行くよ（汗）」

バルグ「ああ（汗）第5話をどうぞ」

第5話 旅立ち

家についたリガンは二人を2階のベッドに寝かせた、するとバルグの懷から龍の水晶が落ちた

リガン「これは!？」

リガンは驚く

バルグ「リガン…」

バルグはリガンを見る

リガン「バルグ、この水晶何処で手に入れたんだ？」

リガンの質問にバルグは「ルーンの森の奥にある湖の深く」と言つた、さらに

ケンキ「ぼ、僕が水晶を抜いたんだ」

ケンキが目を開けて言う

リガン「そうか…とりあえず今日は休んどけ…明日から旅になるがケンキはどうするんだ？」

リガンはケンキに視線を向けて質問する

ケンキ「僕も行くよ…準備とか村に戻ってもできないけど…」

リガン「それならお前の荷物を家から持ってきた」

ドサツ！と

ケンキサイズのリュックがでた

ケンキ「あ、ありがとう」

ケンキはリガンにペコリとお辞儀（ベツトの上で）した

リガン「いや、お前を巻き込んでしまったからな…すまないな」

リガンはケンキに謝るがケンキは気にしてなかった

ケンキ「うん、全然気にしてないよ…それに僕両親も兄弟もいないし一人は寂しかった…でもバルグとリガンと一緒に旅できるから後悔なんてしてないよ」

ケンキは笑顔を見せる

リガン「そうか…とりあえず今日のところは休んで明日出発するぞ」

バルグ「うん…」

バルグは下を向いた

守れなかった…そんな自分への後悔がバルグの心の中で傷ついていく。自分が生まれた村が火の海となって血と鉄のにおいが記憶にのみがえる…バルグは首を横に振り忘れることにした…これ以上嫌な

思いをしても始まらないから…

……

夜…

バルグ「……」

バルグは起きた…2階のベランダへと向かっていく。ケンキはすやすやと寝ている

外は月が満月で照らしている…そんな満月をバルグは見ていた

バルグ「（綺麗だな…村が襲われたのは…満月の夜だったな…）」

彼の故郷が襲撃にあったのはこの満月の夜からだ…圧倒的だった

村は火の海となる他のドラゴンタイプのポケモンは子供と女含めてすべて絶滅してしまった…ドラゴンポケモンは数が少ないポケモンで力もある種族だ…しかし黒の剣はかなりの強さをもっていた

バルグ「（俺が…強かったら…俺は…）」

バルグの頬から一筋の涙がたわる…それは自分が弱かったこと…そして何より自分の故郷と同じ襲撃をルシアでもあったのだから…

強くなりたい…バルグは涙を拭く

バルグ「（俺は…絶対強くなって黒の剣を壊滅してやる!）」

バルグの強い瞳が彼を決心させる

……

次の朝

バルグ「おはよう」

バルグは挨拶した

リガン「おっ！起きたかバルグ、飯にするぞ…ケンキの方はどうした？」

すると

ケンキ「おはよう！」

ケンキが元気に飛び出してきた

リガン「お前元気あるな」

ケンキ「えゝだって今日から旅に出るんだよ僕達？ワクワクしない？」

バルグとリガンは首を横に振る

ケンキ「二人してロマンないよね」

バルグ「いや、俺達にとっては違うんだ」

ケンキ「どういうこと?」

バルグは仕方なくケンキに説明した

ケンキ「なるほどね…二人ともそんな理由で」

バルグ「本当はお前を巻き込みたくないんだがここに残ってもいいんだけど…」

しかしケンキは首を横に振る

ケンキ「それでも僕は行くよ…僕達友達でしょ?」

バルグ「ケンキ…」

バルグの目から涙がこぼれる

リガン「感動のところ悪いがそろそろ行くぞ」

リガンは二人に声をかける

バルグ「いけねえ」

バルグは涙を両手で拭く

ケンキ「そうだね…行こう!」

3人は外へと出た…この家ともお別れして

第5話 旅立ち（後書き）

バルグ「ついに始まったな…」

ケンキ「ワクワクしてきた〜」

リガン「ケンキは元気あるな〜（汗）」

ケンキ「だって旅だよ！こつでないと始まらないじゃん」

ロマン「というか逆に子供に思える（汗）」

ケンキ「作者さんだって頭が子供じゃん」

おい（怒）

バルグ「次回は炎の町らしいが」

次回は新キャラも予定しております

第6話 炎の町の大食い野郎（前書き）

バルグ「更新早いな」

アイデア浮かんできたからね…今回は新キャラの登場です

ケンキ「嫌な予感しかないよ（汗）」

そんな第6話をどうぞ

第6話 炎の町の大食い野郎

ルシアから離れて、バルグ達3人は旅をしている。ここから近くの村や町は炎の町イグリートがある。3人はイグリートを目指して旅をした

途中魔物や凶暴なポケモンがいたが、3人は倒していった。バルグにとつては修行にもあるためケンキも水と風の術を使って魔物や凶暴なポケモン達を倒していった。最近では魔物が活発し、さらにポケモンまで暴れる始末。一刻も早くバルグは黒の剣を壊滅させるために走り出す

……

バルグ「ついた…」

イグニートの町についた3人、地面はレンガで敷き詰められ、家や店などもレンガで造られている。さらにたいまつなどが照らされていてところどころに炎が燃えている

ケンキ「とりあえずまずは情報を集めよう」

リガン「そうだな…それに竜の水晶の事もある…それじゃあそれぞれ分かれて集める…宿屋に集合な」

バルグとケンキは頷いてそれぞれ情報を集めることにした

……

数時間後

ケンキ「バルグ！どうだった？」

バルグ「イフリートという精霊が聖炎の洞窟にいただけしかなかった」

バルグはイフリートという精霊の場所、この世界では精霊は存在している。それぞれ属性をもっている

リガン「おーい！」

リガンが戻ってきた

バルグ「そっちはどうだった？」

リガン「どうやらこの竜の水晶の他に精霊から他の属性の水晶をもらう必要があるらしいんだ」

ケンキ「バルグの情報でイフリートの住処もわかったことだし、明日そこに向かおう」

バルグとリガンは頷いた…すると

ぐううううう…

腹の虫が鳴った

ケンキ「お腹すいてきちゃったね」

リガン「それじゃあこのレストランに行くか…たしかバイキングがあつたんだよな」

リガンはこの町のパンフレットを取り出してレストランへと向かった、バルグとケンキもリガンについて行く

……

ケンキ「わあゝひろゝい」

レストランに入ると席がたくさんでお客も多く食事を楽しんでいる。3人は席に座った、ウェイトレスから水を出され、それから説明を聞いて3人はバイキングへ

バルグ「おいしそうだな」

3人はそれぞれの食べ物を見た、どれもおいしそうで香ばしいにおいが食欲をそそぐ

バルグ「それじゃあ俺はこれにするか」

バルグはハンバーグを取ろうとしたその時

ひよい

バルグ「ん？」

ハンバーグが誰かに取られた、視線を向けるとそこには一匹のポケモンがいた、モフモフとした背中黒く前は白の体毛に顔半分

が黒と白になっていて耳がちょこんとかわいくとがっている。このポケモンはかざんポケモンのバクフーンだ

バクフーン「もーらいつと」

そのバクフーンは嬉しそうにハンバーグをトレイに乗せる。しかもバクフーンのトレイには尋常じゃないほどの食べ物がつている。バクフーン自体もなぜか腹だけはかく太鼓腹であった、さらに顔はプニプニとしていた、しかもそのハンバーグは最後の1個であったのだった

バルグ「おい！それ俺が食べようと取ったんだけど？」

バグフーン「早いもの勝ちだぜ！」

と、ドヤ顔でバルグを見る

バルグ「（こいつむかつく（怒））」

バルグの青筋がピキピキと血管が見えて目だつ

リガン「どうしたバルグ？」

そこにリガンが来た

バクフーン「なんだよ？そこのガキの保護者か何かか？」

バクフーンはイヤミを言うような感じでリガンに言う

リガン「ああそうだが、さすがに人の物を勝手^{ポケモン}に取るのはいんじ

やないか？」

リガンもバクフーンに不定する

バクフーン「ふうんだ！俺の物が俺の物だ！何しようが勝手だぜ」

と言いながらバクフーンは去った

ケンキ「なんだよあいつ（怒）」

ケンキもキレル

リガン「とりあえずさっきのハンバーグ、取っておいたからこれで行く」

リガンはトレイにあるハンバーグをバルグのトレイに少しの量に移した

バルグ「ありがとな」

バルグはリガンにお礼を言う

3人は席に戻った

リガン「それじゃあいただくか」

バルグ・ケンキ「いただきます」

バルグとケンキはガブリとかじりついた

ケンキ「おいしーい！」

バルグ「結構な味だな」

二人とも満足しているようだ…その時何処からか食う音が響く

バルグ「ん？」

ケンキ「なんだろう？」

二人が音がする方向を見るとそこには

バクフーン「うんめえー！ガブッ！アゲッ！」

勢いよくがつつくバクフーンが…さっきのバクフーンのようだった

バルグ「あいつ、さっきの」

ケンキ「なんか勢いよく食ってるみたいだね」

二人は啞然として食事の手を止めてしまう

リガン「こいつの事はいいから食うぞ」

ケンキ「そ、そうだね（汗）」

バルグ達は夕食を食べた

……

ケンキ「おいしかった」

ケンキは満足そうな表情になった

バルグ「それじゃあ宿屋に行こう」

バルグ達は席を立つ、一方のバクフーン

バクフーン「ふう、食った食った」

パンパンと自分の腹を叩く、腹回りがまた大きくなっていて相当の量を食べたようだ

バクフーン「あゝでも動くのめんどくせえ、なあ、おいさっきのガキ二人とおっさん！」

バルグ達は一斉にバクフーンに振り返る

バルグ「なんだよ？」

バルグはキレそうな顔でバクフーンを睨みつける

バクフーン「会計にいきでえんだけど食いすぎてうごけねえんだよ、だから運んでくれよ」

バクフーンは3人に頼む

ケンキ「自分で動けばいいじゃん、自業自得だよ」

ケンキのいうとおりたしかに自業自得だ

バクフーン「んだよ、めんどくせえんだよね、動くのが」

リガン「しょうがないな…わかったとりあえずもってやるよ」

ケンキ「え、リガンいいのそれで？」

ケンキは嫌がるが

リガン「まあ別にいいだろ？」

と、天然そうに言う

バルグ「あいつ天然だしな（汗）」

バルグは呆れた表情をする

……

リガン「うんしょっと…」

リガンは力があるためか軽々とバクフーンを持ち運ぶ

バクフーン「おお！すげえなあんだ！ありがとな！」

バクフーンはリガンにお礼を言う

リガン「いや、ちょうどお前さんみたいな重いのがあってちょうど筋力を鍛えるところだったんだ」

バルグ「そのためか（汗）」

しかもリガンは片手で持ち上げていて町みんなは驚いて啞然としていた。とりあえずこのバクフーンの家まで送った

リガン「到着だ」

リガンはバクフーンを降ろした

バクフーン「いてっ！？もうちょい降ろしてくれよ」

と、とうの本人は少し涙目になっていた

リガン「ほらさっさと入れ、ここからは自分で歩けるだろ」

バクフーン「めんどくせえけどありがとな」

よっこらしょっとバクフーンは立つ、かなり大きな腹はどこからどう見ても目立っている

リガン「それじゃあ俺達はこちらで」

バクフーン「あつ待ってくれ」

バクフーンがバルグ達を呼び止める

バクフーン「どうせ運んでくれたんだからあんたら旅人なんだろう？
よかったら俺ん家に泊まりなよ」

バルグ「いいのか？」

お礼として泊まらせてくれるようだ

バクフーン「ああ、運んでくれたからな」

ケンキ「ほとんどリガンだけだね（汗）」

ケンキがツツコんだ

リガン「それじゃあ上がらせてもらっ…：そういえばお前の名は？」

リガンはバクフーンの名前を聞く

バクフーン「俺の名はレツっていうんだ…：とりあえず上がってくれ」

バルグ「じゃあねえ、お邪魔します」

3人はレツというバクフーンの家へと上がった

その後それぞれベットやらソファなどで眠りについた

第6話 炎の町の大食い野郎（後書き）

ケンキ「なんかレツという奴、優しいのかどうかわからないね（汗）」

最終的にはこんな姿のだけどね（汗）

レツ「おい！まあめんどくせえけどな」

そこ、なまけるな（汗）次回はお前も道連れだ！

レツ「ふざけんなよー！！（怒）」

リガン「まあ次回も楽しみじゃないか」

ケンキ「天然すぎるよりガン（汗）」

第7話 レツの過去と決意（前書き）

今回重い感じになりますが

バルグ「が？」

少しよくなります

ケンキ「わけがわからないよ（汗）」

レツ「第7話行くぜ！！」

おい！？

第7話 レツの過去と決意

次の朝、レツの家へと泊まったバルグ達3人、それぞれ朝食を済ませて準備をした

リガン「ん？レツはどうしたんだ？」

リガンはエプロンを着ていて脱いでいるところだ

ケンキ「あいつ、爆睡してるよ（汗）」

レツ「ガッゴッ」

レツは大きないびきをかいて爆睡していた

バルグ「中々起きないんだよね（汗）」

リガン「おいおい」

すると、レツの鼻がヒクヒクと動きそして

レツ「んあ？もう飯？」

寝ぼけて起きたレツ

ケンキ「そうだよ（汗）」

レツ「マジ！」

レツはすぐさま席についた

バルグ・ケンキ『はやつ!?!?』

バルグ達は朝食をとった

……

バルグ達はレツにお礼を言って行くこうとしていた

リガン「ありがとな」

レツ「いいってことよ、逆にすげえなお前」

レツはリガンの怪力に興味を抱く

リガン「それでも特訓はしてるからな、それじゃあ」

レツ「待った!」

レツが待ったをかけて3人を止める

バルグ「どうしたんだ?」

レツ「どうせ恩を返してねえから俺が洞窟の中とか案内するよ」

ケンキ「え?」

レツは昨日の夜のお礼として聖炎の洞窟に案内してくれるようだ

ケンキ「でも大丈夫なの？魔物も出るみたいだから」

ケンキは不安な表情をするが

レツ「大丈夫だよ」

レツは家に戻って何かをもってきた。それは斧だった

レツ「俺も戦えるから安心してくれ」

ドン！と自慢？の太鼓腹を叩く、腹は叩かれたことで揺れる

バルグ「なんか不安だけだな（汗）」

なぜか不安がバルグ…そしてケンキもさらに不安な表情になる

リガン「まあ案内とか戦闘もできるなら（汗）」

リガンもなぜか心の中では不安に思っていた。なぜなら

リガン「（こんな腹で大丈夫なのか？（汗）」

体系で足を引っ張るとかしないだろうなとそう思っている。不安もあるが4人は聖炎の洞窟へと向かった

……

聖炎の洞窟

入口前にはたいまつが二つある。しかもなぜか暑さが4人をおそう

リガン「あついな」

バルグ「たしかにそうだな…でもいかないといけないし」

二人も暑さを感じていた。しかしこいつだけは違った

レツ「はあ…はあ…」

レツは汗だくでさらに疲れた表情でくたびれていた

ケンキ「レツ、無理ならいかなきゃよかったじゃん（汗）めんどくさいとかなんとか言っているんなら戻ればいいんじゃない？」

ケンキは戻るように言うが

レツ「えゝいまさら戻るのめんどくせゝよ」

ケンキ「なんでだよ（汗）」

ケンキは呆れた

リガン「とりあえず行くぞ、レツも座ってないで案内してくれ」

レツ「わ…わかった」

レツはゆっくりと立ち上がって洞窟の入口に入った

……

中は想像以上に暑かった、中はマグマがわきあがっていて熱風が吹く
ケンキ「あつっ」

ケンキは汗をかく、水タイプのケンキにとっては長い時間いられない場所だ

バルグ「水はもってきてるが熱くならなきゃいいが」

バルグは水を飲む

レツ「あち」

レツも熱さを感じている。炎タイプなのになぜか汗がダラダラと滝のように流れていく

リガン「炎タイプは大体平気なのだがレツはなぜこんな汗をかくんだ？」

バルグ「たぶんあれじゃねえ？太ってるからだ」と

たしかにバルグのいうとおりかもしれない（汗）敵も強く彼等は急いで奥まで進んだ

……

聖炎の洞窟最深部

ここは足場も不安定なのがあるが柱とかがあるため渡れるようになっていた。4人はそれを渡って奥へと進んだ、そしてこの洞窟の最

深部までに到達した、そこには聖壇があり、赤い水晶がくぼみに埋め込まれていた

リガン「あれが炎の水晶のようだな」

レツ「へへっ！俺が先に！」

レツは何処にそんな気力があるのだろうか聖壇の前に

リガン「おい！勝手に！」

レツ「いいじゃん、減るもんじゃあるまいし」

レツが赤い水晶に触れた、すると赤い光が4人を包み込んだ

……

レツ「ここは…」

レツはどこかの町にいた、色がセピア色に染まっていてどんな色なのかわからない

レツ「たしかここって…」

すると町は火の海となった

レツ「これは！？やめる！！」

レツは叫ぶ、そこには2匹のバクフーンがいた、だが黒い服のポケモン…黒の剣の連中により殺されてしまった

レツ「やめろおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおお！……………！！
」

レツは必死に叫んだ…すると光が包み込んだ…

バルグ「今のは？」

洞窟の最深部へと戻ってきた

レツ「……………」

リガン「レツ？」

リガンが声をかける

レツ「あ…ああ…」

リガン「さっきのは…」

リガンは気になってレツに質問する

レツ「俺の…過去だ…」

ケンキ「えっ！？」

バルグ「もしかして…お前も」

レツは頷いた…

レツ「あれは俺がまだマグラシの事だった…」

レツは過去を話した

……

俺の村は黒の剣によって壊滅させられた…生き残ったのは俺だけ…

俺はなんとかイグニートの町について入口で力尽きた…でも町の人
が看病とかしてくれて俺は助かった…俺は働いてバクフーンに進化
してなんとかなった…でも俺は過去の事が消せないでいた…そこで
俺はたらふく食ってそれを忘れることにした…

……

バルグ「……」

レツ「おかげでこんなデブになっちまったな…はは…なさけねえよ
な、過去を消せずにこんなになっちまって」

レツは元気な表情が悲しげになっていた。過去に両親を黒の剣に殺
され…嫌な経験をさせたのだ

ケンキ「そうだったんだ…」

レツ「別に笑ってもいいんだぜ…俺には…」

しかし

バルグ「笑えねえよ!!」

レツ「!?!」

バルグが突然怒鳴る

バルグ「誰もお前の事で笑えるわけねえだろ!! お前は情けなくな
い!! 俺も… お前と同じ両親を失ったから…」

レツ「……」

レツは黙ってしまった

「誰もお主を情けないと思っていない」

全員「!?!」

マグマから重々しい声が聞こえそこからマグマが盛り上がり、何者
かが飛び出してきた…それは一匹のポケモンだ、両翼の翼に鋭い牙、
クリーム色のお腹に太い逞しい両足に竜の顔をしたポケモンだ…こ
のポケモンはかえんポケモンのリザードンという

リザードン「わしの名はイフリート…炎の精霊だ」

そのリザードンはイフリートとそう呼んだ、ポケモンの姿で炎の精
霊と言っている

リガン「イフリート!?!」

ケンキ「あれが!?!」

全員は驚く

イフリート「今の映像はお主の過去の記憶…お主は自分と向き合う
試練なのだ」

イフリートが淡々と語る、つまりこれはレツにとっての自分との向き合いなのだ

レツ「俺が…」

イフリート「お主の心次第だ…ならわしと戦ってそれを証明してみ
せよ！」

イフリートが拳に力を入れる

バルグ「俺もやる！それにイフリートも力を貸すかもしれないから
な！」

バルグは腰から剣を取り出して構える

バルグ「レツ！俺達がいる！だからお前も自分を信じろ！」

自分を信じろ…レツの心に言葉が響く

レツ「そうだったな…」

レツは自分の斧をもち、構える

レツ「俺はただめんどくさがっていて過去をたらふく食って忘れよ

うとしていた…でもそれは間違いだ…自分を追い込んでしまったら俺自体はこの世にいない…ならやってやるぜ！たとえこんな体でも…意地を見せてやるぜ！！」

レッツは気合を入れる

イフリート「それでこそだ…かかってくるがいい」

イフリートは構えた

第7話 レツの過去と決意（後書き）

バルグ「作者もよく考えたな」

いや…俺も過去色々あったからね…

ケンキ「次回とか大丈夫なのか不安だけど」

おい（汗）

第8話 VSイフリート（前書き）

ついにイフリート戦です

バルグ「おっ！更新こっちの方にも手をつけたな」

ケンキ「作者さんのおバカなところもあるしね」（汗）

これでもやっとなんだからね？

レツ「それじゃあ第8話どうぞ」

だから俺のセリフとるな！！

第8話 VSイフリート

ケンキ「アクアエッジ！」

ケンキのアクアエッジがイフリートに向かって放たれる

イフリート「ほほお…中々やるではないか…火炎放射！」

イフリートは口から炎を吐く

リガン「させるか！」

リガンが斧の腹を使って防ぐ

ケンキ「ありがとう！」

ケンキはリガンにお礼を言う

リガン「それよりも目の前の敵に集中しろ、弱点突けるのはお前しかいないんだ」

ケンキ「うん、わかったよ」

ケンキは再び術を詠唱する

バルグ「瞬迅剣！」

バルグは前進しながら鋭い突きを繰り返す

イフリート「はあっ!!」

イフリートは炎のパンチを繰り出しバルグを吹き飛ばす

バルグ「うわっ!？」

バルグは一回転して後退する。そう簡単に精霊を倒すのは難しい…さらに姿はポケモン…リザードンの姿のため強さはかなりのものだ

イフリート「燃えよ…ファイアーボール！」

イフリートは術で火炎弾がバルグに向かって放たれる

レツ「あぶねえ!!」

レツは体を張ってバルグの盾になった

レツ「ぐわっ!？」

バルグ「レツ！」

バルグはレツに駆け寄る

レツ「へへっ…俺は炎タイプなんだぜ？」

あちこちに火傷の痕が目立つ…だがレツは立つ

レツ「だが俺も本気で行くぜ!ここは俺に任せろ!ウラアアアア
!!」

レツは斧を一振りする。体はでかく腹が邪魔で動きが鈍いところもあるが、攻撃は豪快に行く

イフリート「ぐおっ！」

イフリートに斧があたりイフリートは後ずさる

イフリート「中々やるようだな…さすがだ」

イフリートはレツをほめる

レツ「油断しねえほうがいいぜ？」

イフリート「何っ!？」

そこからアクアエッジが向かってくる。イフリートは咄嗟に上空に飛んで回避、そこから

レツ「いつけえ!!」

レツがバルグを掴んでイフリートの元へ投げ飛ばした

バルグ「うおおおおおおお!!!!!!!!」

バルグの一撃がイフリートに当たった

イフリート「ぐわっ!？」

イフリートは真下へと落ちた、バルグはそのまま落ちて着地した

リガン「やったのか？」

バルグ達はイフリートを見る、すでに体はボロボロになっていた

イフリート「フハハハハ！さすがだ、わしもいいバトルができたこと嬉しく思うぞ」

イフリートは笑っていた。豪快な高笑いが洞窟に響く

イフリート「わしの負けだ…この炎の水晶を受け取るがいい」

イフリートはバルグに炎の水晶を渡した

バルグ「あ、ありがとな」

バルグは水晶を受け取る

イフリート「そしてレッ…そしてそのミジュマルよ…お前達に力を与えよう…」

イフリートの体から赤い光が現れ、レッとケンキを包み込んだ…レッだけは炎に包まれ、ケンキは先に光が収まる

ケンキ「なんだろう…何か力がみなぎってきたよ」

ケンキはそう言う、次にレッを包んだ炎が収まる…するとレッの体に変化が

リガン「なっ！？」

バルグ「おい！レッツ！」

レッツ「ん？どうしたんだ？」

レッツは首をかしげる

ケンキ「どうしたじゃないよ…自分の体を見てよ」

レッツ「俺の…うわっ！？」

レッツは驚く、なぜなら…

レッツ「やせてる！？」

そう、レッツの太鼓腹は引っ込んでいて、頬は膨らんだのがしぼんでいた…レッツは普通のバクフーンの体型に戻ったのだ

イフリート「レッツ…お前には特別だ…過去と向き合ったのなら…もう太ることはないだろう…だがお前の進む道…それを見つけて進めていけ…そしてそのケンキというミジユマルには炎の術を使うことが可能になった」

ケンキ「僕に術が？」

ケンキは首をかしげる

イフリート「そうだ、そしてバルグ…次の精霊にあってブレイブドラゴンになる試練を受けよ」

バルグ「ブレイブドラゴンになる試練？」

バルグも首をかしげる

イフリート「そうだ…ブレイブドラゴンの試練だ…」

すると竜の水晶と炎の水晶はバルグの体に取り込んでしまった

バルグ「俺の体に…」

リガン「……」

するとイフリートは

イフリート「ここからはわしも精霊としていつでも出てやるっ…では」

イフリートは消えた

バルグ「俺の中に…イフリートがいるのを感じる」

バルグはイフリートがいるのを感じた

レッ「すげえ！体が軽くなっただぜ！」

レッは嬉しそうにはしゃぐ

リガン「待て、落ち着け…とりあえず外に出るぞ…そこから次の精霊の場所など色々話していくぞ」

ケンキ「そうだね…行こう」

バルグ「ああ」

4人は洞窟の出口へと向かった

第8話 VSイフリート（後書き）

レツ「あゝ軽くていいや」

リガン「なんとかなったな」

バルグ「でもイフリートは俺に……」

それは次回でね

ケンキ「でも僕に他の属性の術なんてね」

他も覚えるようになるからね

ケンキ「えっ!？」

第9話 次の目的地へ（前書き）

さて、一行はイグニートへ

第9話 次の目的地へ

バルグ達4人は聖炎の洞窟から出て、イグニートへと戻ってきた。そしてレツの家に帰りこれからの事を話す

リガン「とりあえずイフリートを仲間にしたことにはなるが…次の目的地の前に…まずバルグにはブレイブドラゴンというのを教えないといけないな」

リガンはブレイブドラゴンについて説明した

リガン「ブレイブドラゴンというのは…選ばれた竜の勇者の事だ」

リガンはそう説明する。リガンの話によると、ブレイブドラゴンは竜の勇者の事でこの世界には世界樹の存在があるが今は枯れていて残っていない…バルグの場合は両親が世界樹から実を食べていてその力をもらっているためバルグはその力を受け継いでいる

リガン「ブレイブドラゴンは、ドラゴンタイプのポケモンにしか受け継がないんでな…他のポケモンは食べても反応はある者もいる。まあ世界樹が選ぶけどな」

リガンは一通り説明を終えた

バルグ「俺がブレイブドラゴンの力を継いでいる…両親はそれで俺を…」

バルグは両親が自分を生かした意味を知った、それはバルグ自体がブレイブドラゴンを受け継ぐ者だからだ…そう思うとバルグの目が

ら涙があふれてきた

リガン「だがまだブレイブドラゴンになったわけじゃない…それには試練があるみたいなんだ」

ケンキ「試練？」

今のバルグではブレイブドラゴンになったわけではない…そのためには試練を受けなければなることはおろかなれないのだ

レツ「でもその試練ってなんなのかもわからねえし場所もどうかわからねえしよ」

レツがそう言う、すると

イフリート「それなら精霊に会えばいい」

何処からかイフリートが現れる

レツ「うわっ！？お前何処から出てくんだよ！？」

レツは驚いてひっくり返る

イフリート「試練は我々精霊に会う…そしてさらにどこかの場所にブレイブドラゴンになるための試練も他の精霊に会えば教えてくれるだろう」

ケンキ「それならイフリートは知ってるはずだよな？」

たしかにイフリートはリザードンの姿をしているが精霊なのだ…

イフリート「それならウンディーネがいるクリスタ水洞の近くに試練の祠（ほこり）というのがある…そこに行けば試練が受けれるだろう…しかし試練は一つだけではないのだ…そこはワシだけでなく他の精霊に聞くがいい…ではな」

そう言うといフリートは消える

リガン「ということは次の目的地はクリスタ水洞だな…たしか水の都クリスナの近くにあるようだからな」

バルグ「そんじゃあそこに行くか」

レツ「そうだな…俺も行くぜ」

レツは笑顔で言う

ケンキ「食料とかでまたデブとかにならないでよね？」

ケンキは念入りにレツに警告する

リガン「それじゃあ行くぞ」

バルグ達は次の目的地、クリスナへと向かった

第9話 次の目的地へ（後書き）

バルグ「色々と進めてきたな」

まあ少しずつ進めて行こうと思う…

リガン「まあ作者はそれでもな」

レツ「俺も仲間になったことだし」

ケンキ「不安だけどね（汗）」

第10話 襲来（前書き）

ついに10話突入！

バルグ「おっしゃあ!!」

ケンキ「10話突破だね」

レツ「今回はなんだ？」

大変なことになります

バルグ「不安だな（汗）」

では第10話をどうぞ

第10話 襲来

次の目的地、クリスナへと旅を続けるバルグ達一行、ただいま港町リッサンへと着いたのだった

リガン「ここから船へと行けばクリスナへ着く、とりあえずチケットを買うか」

バルグ達はチケット売り場へ

……

バルグ「なんとか買えたな」

バルグ達の手元にはチケットが握られていてそこには『クリスナ行き』と書かれている

レツ「だがまだ船が出港するまで時間あるんだろ？」

そう、船が出港するまで1時間もある

リガン「その間食料を買って備えた方がいいな」

ケンキ「それもそうだね、万全の準備をしとかなないとね」

というわけでバルグ達は船旅などの準備をするために買い物へ

……

レツ「なんとか買えたな」

それぞれ買い物袋に詰め込んだ物を運ぶ

リガン「まあそれなりに準備はできた、後は何処かで食事にするか」

レツ「マジ！行く行く！」

レツは興奮する

ケンキ「こんなときに大食いになるんだから（汗）僕達だってお金ないんだから考えてよね？」

レツ「わかってるわかってる」

レツは笑顔で了解して

……

レツ「うめえ」

こちらはリッサンのレストラン、4人は食事を取っている

ケンキ「綺麗だね」

窓からは大海原は広く見える

バルグ「こうしてゆつくりだといいよな」

バルグがのんきに言う

リガン「そうだな、まあゆつくり海を眺めるのも悪くないからな」

4人はレストランで一時を過ごす、一方

リッサンの見える丘には黒いローブと黒い甲冑を来たポケモン達があった、さらにそこに漆黒の鎧を着たポケモンもいた…このポケモンこそ5年前バルグの両親を殺したポケモンだ

黒の剣兵士「ダークナイト様、いかがいたします?」

兵士の一人がダークナイトと呼ばれた漆黒の鎧を着たポケモンに言う

ダークナイト「ここにブレイブドラゴンの末裔がいる。このまま海を渡れば奴等はさらに力をつける…仕留めるぞ…」

ゆつくりと港町に黒の剣の集団が近づいていく

……

レッ「ごちそうさん」

レッは満足そうにお腹をなでる

ケンキ「おいしかった〜それじゃあ会計すませよう」

リガン「そうだな…」

4人は会計へ

「2700ポケになります」

リガンはお金を払った

「ありがとうございました！」

4人はレストランを出ようとしたその時！

ドカーン！！

爆発音が聞こえた

レツ「なんだ！？」

バルグ「外からだ！」

バルグ達は急いで外を出る

……外に出た時町はパニックになっていた。逃げ惑うポケモン達、そして黒の剣と戦っているポケモン達もいる

リガン「まさか黒の剣がここに襲撃してきたのか！？」

ケンキ「やばいよ！急いで港に行こう！」

するとバルグが走り出す

リガン「おい！バルグ！！」

バルグは走り出す、そして黒の剣の兵士の一人に剣を向けた

バルグ「嗚呼あああああ——
——っ！！！！」

勢いよくバルグは剣を振りかざし兵士を刺す

ザシュツ！？

勢いよく血が流れ兵士は倒れた

バルグ「はあ……はあ……」

バルグに冷や汗が出る

リガン「バルグ!!」

3人がバルグに追いついた

バルグ「う……あああああ————っ！！！！！！！！！！」

バルグは叫び攻撃しようとするが

リガン「バルグ……！ 落ち着け……！」

リガンがバルグを一喝した

バルグ「はっ……！」

バルグはようやく収まる

バルグ「俺…」

リガン「熱くなりすぎだ、執念深く剣を敵に向けるな、どんな反撃を食らうかわからないんだぞ…！」

リガンは怒鳴る

バルグ「ごめん…」

バルグは静かに謝る

リガン「とりあえず港まで行くぞ！」

「そうはさせんぞ」

ガシンガシンと足音が響く

バルグ「！？」

リガン「お前は…！？」

バルグ達の前に…漆黒の鎧を纏ったポケモン…ダークナイトだった

第10話 襲来（後書き）

バルグ達の前に現れたバルグの両親の仇、ダークナイト

しかし彼の強さにバルグ達はなすすべもなくやられてしまう、そんな時…リガンが！！

次回『守れない悔しさ』

第11話 友の死（前書き）

今回グロいです。

ケンキ「えげつないこと言わないでよ」

でもシリアスだからねこの小説は

レッツ「それじゃあ第11話をどうぞ」

第11話 友の死

バルグ達の前にダークナイトが現れた

ダークナイト「ほう、お前の両親と同じいい目をしているな…」

バルグ「お前は…誰なんだ？」

バルグは漆黒の鎧を来たポケモン…ダークナイトに話す

ダークナイト「私はダークナイトと呼ばれている。まあ私の正体は隠しているのでは…」

ダークナイトは暗い声でそう言う、いかにも紳士的な感じだ

バルグ「ダークナイト？目的はなんだ！」

バルグは怒鳴るように叫ぶ

ダークナイト「目的…それは貴様の事だ、バルグ」

バルグ「俺…どうということだ！」

バルグの体が震える…なぜだろうか、こいつはやばいオーラを感じると

ダークナイト「まあそうだろうな…5年前に私が、お前の両親を殺したのだから」

バルグ「い…今…なんて…」

バルグは震える声で言う

「ダークナイト、貴様の両親は私が殺した……お前と同じブレイブドラゴンであり、末裔でもあるのを……貴様も両親と同じ末路にしてやる……」

ダークナイトは剣を抜く、刀身は黒く染まっ
ていて紫色のオーラを
出す

バルグ「父さんと母さんを殺したのは……お前だったのか……う……うわあああああああああああああああああああ——」

う

バルグは怒りで剣を抜いてダークナイトを斬りつけようとした

しかしダークナイトはバルグの攻撃を避けていく、鎧は重いようだがそれを装備したまま避けるとはかなりのものだった

バルグ「父さんと母さんをよくも……！ テメエは俺の両親を……！」

涙を流しながら剣を振るバルグ

「ダークナイト、その程度で私を倒すなど……」

ダークナイトは黒い剣で一閃

バルグ「うわあああ————————っ!!!!!!!!!!」

バルグは吹っ飛んで地面に倒れる

ダークナイト「フン！所詮はこの程度の実力か……」

ダークナイトがバルグ達に迫る

リガン「レッ！バルグを担いで港に行け！」

レッ「なっ！？お前はどうすんだよ！？」

ケンキ「そうだよ！リガンはどうするつもり？」

するとリガンは斧を背中から取り出して構える

リガン「ここは俺が時間を稼ぐ！二人はバルグを連れて港で船に乗れ！」

ケンキ「でも！」

リガン「早くしろ！！このままお前等二人とバルグが死ぬんだぞ！！」

リガンは怒鳴り、二人に言う

レッ「……わかった、ケンキ行くぞ！」

レッツはバルグを担いで港へと向かう

ケンキ「あ！待って！！」

ケンキもレッツの後につづく

リガン「……」

ダークナイト「ほう、自分だけは犠牲にして仲間を逃がすとは……懸命な判断だ」

ダークナイトは構える

リガン「怒りを覚えてるのはバルグだけじゃねえ……」

リガンはダークナイトを睨みつけて

リガン「この俺もだ！！テメエはバルデシュさんとノクリアさんの仇だ！」

リガンはダークナイトに向かって迫る

ダークナイト「なら私も敬意を払って相手になってやろう……」

ダークナイトもリガンに迫る

……

港

レツ「ぜえぜえ…なんとか着いたな」

ケンキ「早く船に乗ろう！」

黒の剣兵士「そうはせん！」

黒の剣の兵士がわんさか現れる

レツ「チッ！ここは強行突破するしかねえ！！イフリート！！」

レツはイフリートを召喚する

イフリート「承知した、れんごく」

イフリートはれんごくで兵士達を焼く、兵士達は黒コゲになって倒れた

レツ「行くぞ！！たりやあああああーーーー！！！！！！！！！！」

レツはケンキも担いで勢いよくダッシュして船へと乗った

ちょうど船も出港する時間となり船は港を離れた

レツ「戻ってくれイフリート！」

イフリートは消えていった

バルグ「う…ここは？」

バルグが目覚めます

レツ「目え覚めたか！」

ケンキ「よかった」バルグ

ケンキはバルグを抱きしめる

バルグ「ごめん…」

バルグは謝るが

レツ「いや、それよりお礼を言うのはリガンの方だ」

バルグ「リガン…そうだ！リガンはどうしたんだ…！」

バルグはリガンを探す

レツ「あいつはまだ」

バルグ「…っ！」

バルグは海へ飛び込もうとしたが

バルグ「放せ！」

レツはしっかりとバルグを掴む

レツ「やめろ！ここで飛び込んだらリガンの行為を無駄にしちまう
！」

バルグ「そんな…リガン!!」

……

その頃

リガン「ぐっ…」

リガンはよろよろと後ずさりする…体は傷だらけで血が出ている。
しかもここは港の端…リガンの後ろは海、前方にはダークナイトが
いる。後がない

ダークナイト「私とここまで戦えたことを評価しよう…だがこれで
終わりだ」

ダークナイトは構える

リガン「フッ…」

ダークナイト「何がおかしい」

リガンはふと笑う

リガン「終わり…なら俺とお前でだ!!」

リガンは特攻してきた

ダークナイト「無駄だ」

ザシュッ！！

リガン「がつ！！！？」

リガンの腹にダークナイトの剣が貫く、口から血が流れ出す…しかし

リガン「こんなところで…」

リガンは剣を掴む

リガン「負けるかよ！！」

リガンは最後の力を振り絞って剣を砕いた

ダークナイト「バカな…！？」

ダークナイトは自分の剣が折れたことに驚く

リガン「うらあああああああああああああああー
……………っ！！！！！！！！」

リガンはそのままダークナイトを持ち上げる

リガン「テメエは俺と一緒にここで死ね！！」

ダークナイト「なっ！？貴様！？」

ダークナイトは暴れるがリガンは離れない

リガン「（ごめんなバルグ…俺はここまでだ、お前を育ててそして

お前が黒の剣に殺されてしまったら……俺はバルデシュさんとノクリアさんに顔向けできねえ」

リガンは一步一步とダークナイトを離さずに海の前へ

リガン「（ここでお別れだ……元気でな……バルデシュさん、ノクリアさん……俺もすぐに行きます！）」

リガンはダークナイトと一緒に海に落ちた

ドボン！！

海にリガンとダークナイトは落ちた

「リガン（これで仕舞いだ！！流星群！！）」

リガンは口から青い球体と飛ばした、それが上空に上がり分裂して

それを船からバルグ達が確認していた

レツ「あれは!？」

バルグ「リガンの流星群!？」

流星群は海に落ちて爆発して水柱が立つ

ケンキ「リガン……」

バルグ「リガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

バルグは育ての親でもあり、友の名を叫んだ

……

船はクリスナに向かう

バルグ「……」

バルグはそんな地平線を眺める

守れなかった…彼は最愛の友を失ってしまった…彼がいたから成長
できた、色んな事を教えてくれた…だがそんな友はもういない…こ
の先どうしたらいいのか…

レツ「どうだ？バルグの方？」

様子を見に行ったケンキは首を横に振る

レツ「だめか…リガンは自分を犠牲にしてまで俺達を逃がしてくれ
た…」

ケンキ「リガンの分、僕達もがんばらないといけないね」

ケンキは暗くなる

レツ「バルグが元気になるのを待つしかないな…」

ケンキ「そうだね……」

3人になってしまったバルグ達

リガン…彼の死を無駄にしないように、船は目的地まで行く……

第11話 友の死（後書き）

今回の話でリガンは亡くなってしまいました…

バルグ「リガン…」

バルグは立ち上がれるのか…次回に続く

レッ「なんか妙な感じだな（汗）」

第12話 歩め！バルグ！（前書き）

暗くなったバルグはどう立ち上がるのか…

第12話 歩め！バルグ！

バルグ達3人を乗せた船は3日後、クリスナへとついた

ケンキ「ここがクリスナ…」

バルグ「……」

レツ「…とりあえず宿に行こうぜ」

暗くなった3人は宿へと向かった

……

宿についた3人はベットに倒れる

レツ「あゝ疲れちまったな」バルグ、ケンキ、どっか飯行こうぜ」

バルグ「俺はいい…」

ケンキ「元気出してよバルグ…リガンは僕達のために」

不穏な空気が部屋に漂う

レツ「あゝもう！俺はしらねえぞ！行こうぜ」

ケンキ「う…うん」

レツとケンキは部屋から出た

バルグ「リガン…」

バルグはいないリガンを思いながら眠りについた

……

レツ「……」

レツは黙々と食っている

ケンキ「ねえ、リガンがいない今どうしたらいいんだろう…？」

レツ「んが？んなもん知らねえ…でも俺がリガンの代わりなんてできるかどうかなんだよな…リガンはどうバルグと接したんだろうかわからねえし」

食いながらレツは言う

ケンキ「僕はバルグの事はあまり知らないんだよね」

レツ「ゴクン！何っ！？」

レツは驚く

ケンキ「バルグはリガンと一緒にルシアに来たこととか、後は旅で知っただけで他は何も教えてくれなかったんだ…一緒にいてバルグは普通は僕とも仲良くなっただけ、根暗っぽい感じで僕以外のポケモンとは仲良くなっていなかったんだ」

ケンキはバルグの事を詳しく知らないようだった

レツ「友達なのにお前が知らないなんてな…それによくもまあバルグと仲良くなったよな？」

レツは素っ頓狂な声で言う

ケンキ「うん…僕が一生懸命話しているうちに仲良くなったんだ…でも知らないといけないと思うんだ…バルグだって辛いはずだよ」

レツ「そうだな…よしっ！あいつに何か買ってきてやろうぜ」

レツはグーサインをしてニヤリと笑みを浮かべる

ケンキ「そうだね、まずは食べ終わってからにしよう」

レツとケンキは再び食事をした

……

バルグ「ここは……」

バルグは何処かの空間にいた、空そらの空間で自分が空へと浮かんでいくようだった

バルグ「ここは一体…」

すると、バルグの目の前から少し透けている一匹のクリームガンがいた

バルグ「リガン！」

バルグはリガンに似たクリムガンに向かって走っていく…しかし走っていくうちになぜか遠く感じた

バルグ「待つて！待つてくれ！！」

バルグは必死に追いかけた、自分を育ててくれた親代わりとして…そして友として、だがリガンの姿は遠くなって消えていった

バルグ「リガン…」

バルグの目から涙がポロポロと流れ落ちる

すると辺りが暗くなる

バルグ「俺…俺どうしたらいいんだ！俺一人になるの嫌だ！！…どうしてリガンが死なないといけないんだ！！俺は！！」

バルグの泣き叫びが空間に響く、誰もいない孤独な世界…

バルグ「うう…どうすりゃいいんだよ……」

バルグの悲しみが滝のように流れていく…すると

バルグ「な…なんだ？」

バルグは泣き止んだ…バルグの目の前から一筋の光が現れる

バルグ「温かい…これって」

それはぬくもりがあるような温かな光だった…光から声が聞こえる

バルグ…

バルグ「え？」

それはリガンに似たような声だった

バルグ「リガン！リガンなのか！」

バルグは光に向かって叫んだ

バルグ…悲しむな…

バルグ「え？」

お前は一人じゃない…

すると今度は

そうだ…私はお前を見守っているぞ

バルグ「父…さん…？」

さらに今度は

あなたには大切な仲間がいますよ…暗くなっではいけません

女性の声が聞こえる

バルグ「母さんの!」

強くなれバルグ……

お前はブレイブドラゴンの末裔であり……ブレイブドラゴンになる資格がある……

強くなりなさい……仲間を守れるように

バルグ「うん!がんばるよ父さん!母さん!リガン!」

光は段々と消えていき、バルグはその後意識を失った

……

バルグ「ん……」

バルグは目を覚ました。何処かの部屋の天井だ

バルグ「夢だったのか……」

バルグはベットから飛び出した

バルグ「父さん……母さん……リガン……俺、強くなる……あいつを倒して仇はとる……だから見ていてくれ……」

バルグは天井を見る……天国にいる3人に向かって

……

ここは黒の剣本部、暗黒の雲が本部である城を包み込んでいた…その中で

ダークナイト「申し訳ありません…」

ダークナイトは生きていた、あの時流星群を食らったが無事に生きているようだった、漆黒の鎧はボロボロになっていた。ダークナイトは玉座に座っている一匹のポケモンの前に片膝の体勢をしている玉座に座っているポケモンは王冠のような突起をして両手は大剣のような形をしている。こうていポケモンのエンペルトだ、だが普通のエンペルトとは違って、このエンペルトは黒い姿をしていた。このエンペルトが黒の剣のボスだろう、黒いマントをつけていて腰には剣をさしている

エンペルト「よい、ブレイブドラゴンを逃がしたのは失態だったな…だが他の任務ではよくやってくれた、この件だけは見逃してやるう」

ダークナイト「ありがたき幸せ…」

ダークナイトは忠実にエンペルトに頭を下げる

エンペルト「ではそれ以外の次の任務を与える…よいな？」

ダークナイト「御意」

ダークナイトは再び頭を下げた

第12話 歩め！バルグ！（後書き）

バルグなんとか復活だね

バルグ「なんとかな」

レツ「俺もなんとか嬉しいぜ」

ケンキ「バルグはそうでないだね」

バルグ「心配かけてすまないな」

さて次回はケンキに注目です

ケンキ「僕？」

第13話 ケンキの過去（前書き）

さて、今回はケンキが重要になってきます

ではどうぞ

第13話 ケンキの過去

次の朝

レツ「あゝついにか」

バルグ「まあお前は炎タイプだからそうだろうな」

レツはなんだか乗り気でないようにやる気がないように見えた、ここはクリスタ水洞…中は水晶が輝いていて水が滝のように流れる

ケンキ「でもここは僕にとっては天国だよ」

ケンキははしゃぐ

バルグ「とにかく行こうぜ」

バルグ達は先へと進む

……

レツ「おっと！」

レツは斧の腹で防御した、そこから勢いよく水鉄砲が飛んできて斧の腹が濡れる

バルグ「裂空斬！」

バルグがジャンプして回転斬りを鮫のような魔物に斬りつける、魔物は斬られ血が噴出する

ケンキ「やぁ！」

ケンキはシエルブレードで斬りつけていった

レツ「終わったようだな」

3人はそれぞれ武器をしまった

ケンキ「さすがに僕もきつくなってきたよ」

ケンキは疲れた表情がうかがえる、ここは水タイプのポケモンや水属性の魔物が多い、水タイプを吸収したり効果がうすいというものもあるためケンキでは苦戦はするだろう

バルグ「炎属性じゃ効果うすいし、とりあえず休憩しようぜ」

バルグ達は休憩した

……

レツ「ふう〜」

レツは一息いれると座る、後からバルグとケンキも座る

バルグ「なあケンキ」

ケンキ「何？」

バルグがケンキに声をかける

バルグ「両親とか何か記憶でもあるか？」

それは前に旅立つ前の事だ

『それに僕両親も兄弟もないし一人は寂しかった』とケンキはそう言っていた

ケンキ「そういえばそうだね…でも思い出せないんだ…なんだろう、何か引つかかるようなモヤモヤするようなそんな感じなんだよね」

レツ「引つかかる？それにモヤモヤ？」

レツが首をかしげる

ケンキ「うん、それがなんなのか考えただけで頭が痛いんだ」

ケンキは頭をおさえこむ

バルグ「無理すんなよ…一緒に旅してる仲間だから」

バルグがケンキを心配し、励ます

ケンキ「ありがとう…僕は大丈夫だよ、休んだとこだし行こうよ」

バルグとレツは頷いて立ち上がり奥へと進む

……

ケンキ「あ！あつたよ！」

クリスタ水洞の最深部に聖壇があった、そのくぼみに青い水晶がはまっていた

レツ「とりあえずは水晶を取ろうぜ」

バルグ達は聖壇にかけてきて聖壇のくぼみにはまってる青い水晶の前へ

ケンキ「それじゃあ取ろう」

3人は水晶を掴んで取ろうとする…すると光が3人を包み込んだ

……

バルグ「ここは…」

レツ「真っ暗でなんにも見えねえ…」

ここは何処かの空間なのだが辺りは暗かった、すると

バルグ「あれ？」

バルグは何か見つけたようだ

レツ「これは！？」

バルグ達が見たものとは…顔はわからないがそれはこの世界に存在

しない者…

バルグ「なんだ？ポケモンでもないみたい」

その者は姿が変わる…その姿はミジュマルだった

バルグ「これって!？」

そう、ケンキしか思い当たらない…そして暗い空間は光へと包まれた

……

気づいた時には聖壇にいた、まだ水晶はくぼみにはまったまま

バルグはハッと気づいてケンキに聞く

バルグ「ケンキ」

ケンキ「……」

ケンキは黙ってしまふ

バルグ「無理しなくてもいい、とりあえず水晶抜いて」

ケンキ「ううん、大丈夫だよ……」

ケンキは暗い声で言う…辛いのはわかる…でもレツも戦争で両親を亡くしている…なら自分も言うしかないのだった

ケンキ「話してあげるよ……」

ケンキはゆつくりと語った

ケンキ「僕…本当は元人間なんだ」

バルグ「元人間？」

レツ「たしかこの世界には存在しない者だったな…俺はおふくろに昔そういう話聞いたことがあるんだ」

レツは聞いたことあるので頷いた

ケンキ「そう…僕はこの世界の人間じゃないんだ、この世界に来た時僕は記憶を失った…人間の頃の僕の記憶のほとんどが」

ケンキは顔を下に向く

ケンキ「その時僕は別のポケモンに拾われて育てられた…もちろん僕が元は人間というのを内緒にしてね…それから僕はルシアへと来た…一人ぐらしは最初なれなかったけど次第になれてきた…そして僕はバルグに出会った」

バルグ「……」

不穏な空気が最深部に流れる

ケンキ「でも僕はこのまま自分が人間だったのを隠しておきたかった…どうしてだろう…なんだか涙が出てきちゃった」

ケンキは涙を拭う

自分が元人間だったこと…ポケモンへと姿が変わったこと、それで受け入れるわけじゃない…誰も信用できないかもしれないケンキはそう思っていた。しかし

バルグ「ケンキ…」

バルグがケンキの肩をポンと軽く叩いた

バルグ「俺は信じるよ…」

ケンキ「え？」

バルグ「お前はお前なんだ…そうでなかったら俺はお前と友達になれなかったしこうして旅に出られなかった…俺はお前の味方にいる。一人で寂しい思いはしない…」

バルグは胸の辺りを叩く

ケンキ「ありがとう…」

ケンキは涙ぐみながらバルグに感謝の言葉をかける

レッ「みんな同じだ…俺も親父やおふくろを失ってからその辛さを忘れるように飯をたらふく食った…そしてこうして過去を断ち切るように力をつけた…俺の腹も引っ込んだけどな」

ニシシとレッは笑う

ケンキ「レッ…」

そうだ、僕はもう一人じゃないんだね…ケンキはそう思った

「そう…あなたは一人じゃないですよケンキ」

何処からか美しい美声の女性の声が聞こえた、聖壇の前にある湖から一匹のポケモンが現れた、美しい赤と青の鱗に扇のような尻尾、そしてピンクの長い髪のパokemon、いつくしみpokemonのミロカロスだ

ケンキ「君は…？」

「私はウンディーネ、精霊です」

そのミロカロスはウンディーネと名乗った

ウンディーネ「そしてあなた達を待っていました」

バルグ「待っていた…でも試練の祠は何処なんだ？」

すると滝がみるみると水をなくしそこから祠がたっていた

ウンディーネ「ブレイブドラゴンの素質を持つ者よ…祠へと向かいなさい」

バルグ「……」

ケンキ「バルグ…気をつけてね」

「ああ」とバルグはケンキに言った…そして一步一步と水の上を歩

く…

そしてバルグは祠へとついた

ウンディーネ「中に入ってください…そこからあなたのブレイブドラゴンの試練が始まります」

バルグ「行ってくる！」

バルグは祠の中へと入った

第13話 ケンキの過去（後書き）

えゝケンキが元人間という設定は最初そうしようと思って迷ったあげくにそうしました

レツ「マジ驚いたな〜」

まあ元人間ぐらいいたっていいと思うしね…何処かの悪魔亀大魔王とはね（汗）

そして次回はバルグが試練を受けます

第14話 試練（前書き）

試練って何をやるんだろう…

第14話 試練

バルグは暗い空間にいた

バルグ「（一体何をするんだ…）」

バルグは試練が何なのかが気になっていた。すると辺りが明るくな
った

バルグ「ここは…」

辺りは海だった、淡い透き通ったオードブルーの海、バルグの足元
は沈むこともなく浮いていた

バルグ「ここで何があるんだ…？」

その答えが今明かされる

海から何かが浮上してきた、それは一匹のポケモンだ

体はでかく、そしてクジラのようなポケモンだ

うきくじらポケモンのホエルオーだ

ホエルオー「ほほう…お前さんがブレイブドラゴンを継ぐものかの
う？」

そのホエルオーは声、口調からして老人だろう…長年もいたような

そんな感じだ

バルグ「あんたは？」

ホエルオー「わしはホエルオーのエルオー…水の試練を受けに来たのか？若者よ」

ホエルオー、エルオーの質問にバルグは頷く

エルオー「さて、水の試練は水のように透き通るようなものでないと合格にはできん…そこでだ、お前さんにはこの先にある島へと向かうがいい…ただし」

バルグ「うわっ！？」

ドボン！

バルグは海に落ちた

エルオー「泳いで向かうがよい、そこでわしは待ってるぞ」

バルグ「ま、待て！」

エルオーは島へと向かった、バルグから見ると遠かった

バルグ「やるしかないな…」

バルグは泳いで島へと向かった

……

バルグ「はあはあ…」

バルグは一生懸命泳いだ…しかし泳いでも島には近づけられない…
なぜだか進んでいないような感じだ

バルグ「くっ…なんで泳いでも島につかないんだ！」

バルグは悪態をつく…ここまで泳いでの試練…だがここまで泳いで
もその距離は縮まない、むしろ遠く感じるようだった

……

一方

ケンキ「バルグ…」

ケンキはバルグを心配する。あれからもう数時間がたっている

ウンディーネ「大丈夫です。バルグがこの試練の意味をわかれば試
練はクリアできます」

レッ「その割にはかなりたってるな…あゝ腹減った」

レッは腹をさする

ウンディーネ「（バルグ…あなたはこの試練の意味をわからなければ
なりません…水の試練はあなた自体の心が試されるのです…）」

ウンディーネは祠を見てそう思っていた

……

バルグ「くっ…」

前へ前へと進んでも島には一向にたどりつけない…むしろますます遠く感じるようになった

バルグ「（前へ前へと進んでも島にはたどりつけない…この試練って一体なんだっていうんだ！）」

バルグは怒りを感じていた…果たしてバルグは試練を乗り越えることができるのか…

バルグ「…でもただ怒りに任せてしまえばたどりつけない…ん？そういう海がにごってるような」

見ると海は淡い青色からにごった緑色になっていた

バルグ「そういうば進むに連れて海がにごってる…まるで、俺の心そのものだ…まてよ！」

バルグは何かわかったようだ

バルグ「そうか！ただ前に進んでちゃだめなんだ…俺自信の心を平常にすれば」

バルグは目をつぶって瞑想した…するとにごっていた海は段々と淡い青色の海へと変わっていった…そしてそのままバルグは目をつぶったままクロールで泳いでいった

バルグ「（そうだ…俺はリガンを失ってから迷っていたんだ…リガンはあの時俺を逃がすために自分を犠牲にしてまで俺を守って…リガン、俺はもう迷わないよ…俺、わかったよ…リガンはずっと俺を見守っている。なら俺はリガンの死を無駄にしないで仲間と共にあいつを倒す…俺は何も見えていなかったんだ…）」

バルグの思いが動いたのか段々と進んでいく

バルグ「（父さんや母さんも同じだ…復讐は忘れないけど、大切なのは守れるような力！リガン、父さん、母さん…俺やるよ、仲間を守るそんな強さになれるように！）」

するとバルグは光に包まれた…そして光がおさまるとすでにバルグは砂浜にいた

バルグ「ここは…」

目を開けてバルグは言う、するとエルオーがバルグの前に現れた

エルオー「よくぞ水の試練をこなした、水は人の心そのもの…お前さんには迷いなど辛い事がお前さんの心に影響して水をにこらせてしまった…だがお前さんはブレイブラゴンになる意味…そして復讐だけがすべてじゃないとわかった」

バルグ「うん…俺はただあいつに復讐したい気持ちはある…でもただ復讐だけであいつに立ち向かっても勝てない…それはわかった、俺の進む道を俺が決める！希望を俺が導くんだ！」

バルグの目は真剣になっていた

エルオー「よかろう…お前さんには水の力と奥義を教えよう」

エルオーの体が青色の光となり、その光はバルグの体にスウーとはいった

バルグ「これが水の力…やってみるよ、リガンや父さんと母さんの死を無駄にしないためにも！」

バルグは粒子となって消えた

第14話 試練（後書き）

バルグ「作者…」

どうしたの？

バルグ「ただ復讐だけがすべてじゃないんだよね？」

まあそうだね、たしかにこの小説は復讐というのがテーマだけど、ただ復讐だけがすべてじゃないということ…まあバルグだけじゃないよ、復讐を誓ってる者なんて

バルグ「え？」

それはまた後ほどね…次回でクリスタ水洞編終わりです。

第15話 新たな力と新たな目的地へ（前書き）

今回はついにあのポケモンが！

ではどうぞ！

第15話 新たな力と新たな目的地へ

バルグ「…戻ってきたのか？」

バルグは目を開けるとそこは祠の中だった

バルグ「……」

無言のまま祠を出た

出ると水が透き通る洞窟…そして待っている仲間達

ケンキ「バルグ！」

ケンキがバルグに駆け寄る、後に続いてレッツも駆けつける

レッツ「どうやら試練に合格したらしいな」

バルグ「ああ！水の力をな！」

バルグは元気よく言う

ケンキ「あれバルグ？なんか雰囲気変わったよね？」

ケンキはバルグが変わったことに気づく

バルグ「べ、別に変わってなんか…」

皮肉な態度で言うが頬が赤くなってる

ウンディーネ「どうやら水の試練を越えたようですね」

ウンディーネが浮きながら言う、水がないのに空中に浮いている

ウンディーネ「さて、ここからは私もあなた達と一緒に行きましよう」

ウンディーネの体から青い光が現れ、ケンキを包み込み光が収まる

ウンディーネ「私を呼び出せば私も戦えますので…ケンキ、あなたが召喚する権利があります」

ケンキ「そうだね」

ケンキは頷く

ウンディーネ「そして…あなたには新たな力が与えられる」

そう言うときケンキの体が光だした

バルグ「これは！」

光が包み込みケンキの姿が見えなくなる…光が収まるとそこにはミジュマルの姿をしたケンキではなかった

くりんとした小さい両目、両頬にはV字に分かれた白くてピンと伸びた髭^{ひげ}両腰には2枚のホタチがついている

ケンキ「この姿は…」

そう、この姿はミジュマルの進化系…しゅぎょうポケモンのフタチマルだ、つまりケンキは進化したのだ

ケンキ「力がわいてくる…僕は進化したんだ」

ケンキは驚きが隠せずばーぜんと自分の姿を見渡す

ウンディーネ「そして次に会う精霊…シルフに会いなさい…そこで風の試練を受けなさい」

するとそこから

イフリート「久しぶりだなウンディーネ」

イフリートが現れた

ウンディーネ「お久しぶりですイフリート、こちらの炎の試練はどうですか？」

そういえば炎の試練はやってはいなかった…あそこは祠がないのにどうやって試練をするつもりなのか…？

イフリート「心配はない…わしが腕試しして認めさせた」

バルグ「えっ？ちょっと待てよ、それじゃあ…」

イフリートがバルグに視線を向けて

イフリート「わしがふさわしいのかを確かめに戦ったのだ…お前の絆というのをな」

そう、すでにバルグは炎の試練を受けたということなのだ

ケンキ「そうだったんだ…だから聖炎の洞窟には祠がなかったんだね」

イフリート「左様、わし自体がそれを見極めるための試験官みたいなものだ、ガハハ！」

豪快に笑うイフリート

ウンディーネ「それじゃあ心配ないですね…ではバルグ、水の水晶はあなたの力の一部となりましょう…」

水の水晶はバルグの元に浮いて近づき、バルグの体の中へと入っていった

レツ「これで二つだな」

バルグ「ああ、さて次のシルフがいる場所が何処かだけど？」

そう、次に会う精霊はシルフ、住んでいる場所を見つけないといけない

レツ「たしかここからだ」と北風の霊峰という場所があったと思うんだが？」

ウンディーネ「はい、そこにシルフがいます…ここから北西に行っ

た所にあります。では」

ウンディーネは姿を消した

イフリート「次の試練へ行くがいい、ではわしも消えよう」

イフリートも続けて消えた

バルグ「行こう！北風の霊峰へ！」

レッツ「おう！」

ケンキ「うん！」

3人はクリスタ水洞の出口へと向かった

第15話 新たな力と新たな目的地へ（後書き）

ケンキ（フタチマル）「まさか僕が進化するなんて…」

だっていつまでもミジュマルでいるわけにはいかないからね、進化させてもらったよ

バルグ「次はシルフだな」

レツ「北風の霊峰か…どうなるかな」

そうだね…次回もお楽しみに

第16話 風吹く出会いと四将（前書き）

3人は北風の霊峰へ！そしてそこに新たな出会いが！

第16話 風吹く出会いと四将

ピュオオオオオー……ッ

風の音が響く…

風が吹くところに小屋が建っていた

ギィ…

小屋のドアが開くと一匹のポケモンが出てきた、両翼は羽毛で短い水色の枝分かれした尻尾に小さい白いくちばしのポケモン、ハミングポケモンのチルタリスだ

チルタリス「風が荒れてきたわね…」

そうつぶやくと小屋へと入ってしまった

……

バルグ「うゝさむっ！」

ケンキ「さすがシルフがいる北風の霊峰だね…風が強くて寒いよ」

レツ「俺は炎タイプだから大丈夫だけどよ…」

3人はクリスタ水洞から北西にある北風の霊峰についた、北風の霊峰は風が強く寒い…雪は降り積もってなく、さらに北風だけが寒さ

の原因らしい

バルグ「早くシルフに会ってここを抜けようぜ」

レツ「それもそうだな……ここにいちやあ無理がある」

バルグ達は山へと登った、その後から

「ククク、奴等はシルフに会ったもんだがそうはいかん」

岩陰から一匹のポケモンが出てきた

両肩は炎が出ていて目つきが悪く背中には突起が4つ生えていて尻尾が炎となっていてゆれている。ひふきポケモンのブーバーンだ

ブルーバーン「さて、この４將軍である俺様『豪炎のバンスト』が奴等より先にシルフと風の水晶をいただく：グハッハッハッハッハッ！」

バンストは豪快に笑い、手下共と一緒に山へと登った。

•
•
•
•
•
•

風は強く厳しい……吹かれながらもバルグ達3人は歩いていく

レツ「こりゃあ早くここをぬけねえと吹き飛ばされそうだぜ」

バルグ「そうだな…急ごう！」

バルグが走っていくと

ガラッ！

ケンキ「バルグ！危ない！」

バルグ「え？」

バルグの足元の足場が崩れてしまった

バルグ「うわっ！？」

バルグは崩れていない足場を掴む、レッとケンキがバルグを引っ張る

レッ「バルグ！」

ケンキ「しっかり！僕達が助けるから！」

二人はバルグの手を掴んで引っ張り上げた

……

レッ「危なかった」

二人は冷や汗をかいた

ケンキ「バルグ、一人でつつきらないでよ」

バルグ「ごめん」

バルグは二人に謝る

レツ「ここは慎重にいかねえとオダブツだなこりゃ」

レツは崖を見下ろすと底は見えないほどだった…落ちたら一環の終わりだ…だが飛行タイプのポケモンがいたら話は別なのだが…3人は先へと進んだ

……

慎重にバルグ達は進んでいく、すると

バルグ「ん？あれって小屋か？」

バルグは小屋を見つけた

ケンキ「無人なら助かるけど…」

レツ「行ってみようぜ」

3人は小屋へと向かい、ドアを鳴らす

コンコン

すると

ギィ…

3人『！？』

チルタリス「誰？」

出てきたのは一匹のチルタリス

バルグ「お、お前は？」

チルタリス「ここを登ってくるなんてめずらしいわね、あたしはチルタリスのリルノ…この山小屋で生活してるの」

リルノと呼ばれたチルタリスはこの山に住んでいるらしい

バルグ「そうか、俺はオノンドのバルグ、この山にいるシルフに会いたいんだ」

リルノ「え？シルフってあの？」

リルノが素っ頓狂な声で言う

リルノ「まあ今はこんな暴風でシルフのそこにはいけなさそうだからここに泊まっていつて」

レツ「おおゝ助かるぜ」俺はバクフーンのレツ」

ケンキ「僕はフタチマルのケンキ、よろしくね」

3人はリルノの小屋へと入っていった

……

その頃…

「クロバルト様」

黒の剣兵士は黒いエンペルト…黒の剣のボスであるクロバルトの元へと訪れた

クロバルト「新たな四将か…まあ地のグライスはもう用済みだ、奴を牢屋へ閉じ込めろ」

兵士「御衣」

兵士はすぐにあとずさった

クロバルト「ついにか…」

すると今度は別のポケモンがクロバルトの元へさらにそこにはもう一匹灰色の鎧をつけたポケモンが現れた、灰色の鎧を着たポケモンの正体は隠れていてわからない…もう一匹は白鳥のようなポケモンで真っ赤なローブを身につけている、しらとりポケモンのスワンナだ

スワンナ「クロバルト様、すでにこの新しい四将となる奴を回復させました」

スワンナはあくどい顔でそう言う、口調からして♀のようだ

クロバルト「グライスに変わっての新たな四将だ…そうだな…さしずめ豪腕のドラゲニスと名づけよう…ドラゲニスよ」

ドラゲニス「……」

ドラゲニスは無言で喋らない

クロバルト「ブレイブドラゴンの末裔を殺せ…バンストが失敗して
しまったら次は貴様にくれてやるっ…」

ドラゴニス「…御衣」

第17話 シルフ

次の日

バルグ「風がある程度やんだみたいだな」

風はある程度やんでいた。リルノの小屋で一晩すごしたため調子がいい

リルノ「ねえ？そのシルフに会ってどうするの？」

リルノの質問にバルグが応える

バルグ「俺はブレイブドラゴンの末裔なんでな…これから試練をするんだ」

リルノ「へえ〜ねえあたしも行っていいかしら？案内はまかせてちょうだい」

レッツ「そうだな〜リルノなら詳しいかもしれないしお願いしようぜ」

というわけでリルノを加えての4人パーティでシルフがいる場所へ

……

北風の霊峰山頂

バルグ「ここか…」

そこには祠とさらに風の水晶が収められていた

リルノ「あれが風の水晶よ…シルフはいるのかしら？」

すると

「いるわよ」

何処からか声が聞こえた、祠の前から光が現れ、光が収まると一匹のポケモンがいた

周りにモコモコとした毛玉につぶらな茶色の瞳にくるんとした緑色の耳のようなものをつけているポケモン、かぜかくれポケモンのエルフーンだ

バルグ「あれが…シルフ」

シルフ「ええ、私がシルフよ」

シルフはそう応える

シルフ「ついに来たわね、ブレイブドラゴンの試練を受けに来たんでしょ？ならその祠に入って試練を受けるのよ」

バルグは頷いて祠へと入っていった

ケンキ「僕達は待つてなきゃいけないかもね」

シルフ「なら、この風の水晶に触れてみなさいよ、もっとも誰の記

憶かはわかってると思うわよ」

レツ「なんだって？」

一体誰の事なのか？

リルノ「もしかして…あたし？」

シルフ「他に誰がいるのよ？」

たしかに、レツとケンキはすでに記憶済みなのでリルノだけだ

レツ「どうすんだリルノ？」

リルノは考えた…しばらくして口を開いた

リルノ「わかった…バルグもブレイブドラゴンの試練ってものに挑戦してるし、ならいいわ」

リルノはいいと言った

レツ「それじゃあ覚悟して見るぞ！」

ケンキ「バルグには試練に集中しないとね」

リルノ「それじゃあ…いくわよ！」

3人は風の水晶に触れた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7855u/>

龍の旅～ドラゴンリベンジャー～

2011年12月13日02時51分発行